

大府市議会

無所属クラブ 議会レポート

2024
SPRING

春

YOUR VOICE

あなたの声が、まちを動かす力になる。

党籍なし完全無所属

大府市議会議員 宮下しんご



【3月定例会報告】国内外の流動的、多元的リスクから暮らしを守るために―

◆無所属クラブの視点：令和6年度 予算審査

新型コロナが5類感染症へと移行されて以降、飲食やレジャー等の分野で消費の回復が急速に進み、社会経済活動の活発化が国内経済に光を差しつつある一方で、中東情勢や金融資本市場の変動、アメリカ大統領選などの海外動向の流動的要素、また国内的にも元旦の能登半島地震による影響等、多元的なリスクが併存しながら推移していく社会、経済の情勢はおそらく今後も継続していくものと考えられます。無所属クラブはこうした前提のもと、次の2つの視点に基づき、令和6年度当初予算の審査に臨みました。

令和6年度予算審査 無所属クラブの視点

◆一人ひとりの日々の暮らし、市民の“生きる”を守る最も身近な自治体として、未来にわたって持続可能な行政経営に向けた目配りが適切に担保されているか。

◆そのうえで、岡村市長はどのようなビジョンのもと、新たなまちづくりのチャレンジにその一歩を進めていこうと考えているのか。

【厚生文教委員会】予算質疑Pick Up

◆大府市若者会議

Q. メンターとして参加する職員が、ファシリテーション等に関する知識、技術をあらかじめ学ぶ機会を設ける考えはあるか。

A. OJT（オンザジョブトレーニング）や研修で知識や技術を学ぶとともに、会議の主旨やこれまでの経緯、当日の目標などを共有する機会を設ける。

↓↓↓

【意見】

職員の実践的な成長機会として理解はするが、若者の考えや意見の主体性にできるだけ干渉しない関わり方の線引きを考えるうえで、タイミングには留意が必要。

◆大府放課後クラブでの夏休み期間 中の昼食提供の試行的実施

Q. 令和6年度、どのような点に着目して行うのか。

A. 実際のニーズを把握し、保護者にも放課後クラブの職員にも利用しやすい運用方法になっているかという点に着目していく。

Q. 全市的に持続可能な運営を念頭に、課題や改善点を抽出するといった前向きな趣旨と理解してよいのか。

A. 他の放課後クラブへの拡大に向けて課題を検討し、今後の方向性を判断していく。

◆民間フリースクール等の授業料の 半額補助（月額2万円まで）

Q. 民間のフリースクールへの通学を出席扱いとする対応について、具体的にどのように考えているのか。

A. 現在、『長期欠席者の「指導要録上の出席扱い」に係るガイドライン』を作成中。校長がフリースクール等への通学を出席扱いにする目安や、フリースクールの活動を確認するシートを準備し、市内の全小中学校で同じ対応ができるようにしていく。

Q. 民間のフリースクール側に一定の様式があるような場合には、そのまま提出してもらえる対応は可能か。

A. 民間フリースクールの任意様式でも提出は可能。



春のスペシャル対談

YOUR VOICE SPECIAL

特集

対話こそ政治の原点—

今こそ

たかばとくこさんと語ろう

たかばとくこさんのプロフィール

1966年生まれ。刈谷北高校、愛知淑徳短期大学卒。2007年、現職の後継指名や、後ろ盾のない中、大府市議に初当選し、完全無所属の会派「無所属クラブ」を立ち上げ。以降、2023年まで4期16年を務める。政策力とリーダーシップで、全国各地の議員、首長とネットワークを構築。得意料理は豚の角煮。猫と馬が好き。

“完全無所属”の源流—市民の多様な声を、まちを動かす力に

◆いずれの政党、組織にも紐づかない
“前代未聞”の存在として

しんご：とくこさんが大府市議選に初当選された2007年、当時の市議会の空気はどのような感じでしたか。

とくこ：あの頃の議員定数は21。会派構成は、自民クラブが10、市民クラブ（労組系や当時の民主党系）が6、公明党が2人、共産党が2人。既存の政党や組織とのつながりを持たない議員は私が初めてでした。市民の皆さんと同じ政治不信を抱える中、信じられる政治家のあり方を実践しようと、我が身ひとつで政治の世界に飛び込んだ状況で、どの政党と考えが近いのかも分からない。なので、“完全無所属”に最初から強い思いを持っていたわけでは必ずしもなくて、理念や政策など

に納得ができる政党が見つからない限り、そう行動することが有権者への誠意だと考えたんです。気がつけば、そのまま16年もの時間が過ぎていました（笑）。

◆市民の多様な声を、まちを動かす力に
するということ

しんご：僕が無所属クラブの一員として、議会の活動をともにした2019年からの4年間。任期の大半がコロナ禍という特殊な状況で、“完全無所属”の立場で活動する我々の政治のあり方も大きく変わったように思います。こうした経験も踏まえ、市民の多様な声の受け皿であり続けるために、これから求められる議員像、あるいは政治家像をどのように描いていますか。

とくこ：コミュニケーションのあり方が大きく変わった中、大災害や感染症禍で社会全体が一斉に大変な状況になった時こそ、声なき声、小さな声に対する政治家の感性が試されます。また、お困りごとへの対症療法で話を終わらせては、社会も前進しません。問題を本質から整理し、対話と議論を通じて困難を生んでいる構造を解消することが政治の役割です。そのうえで、頼れるもの、守ってくれるものがない“完全無所属”の立場も付け加えて言えば、政治家として己の身を常に律すること、みずからの言葉と行動にきちんと説明責任を果たせる透明さ、クリーンさも、自分の声を届けたいと思ってもらえる存在であるためには、必須の条件だと思っています。